（４）②様式第４号－２（報告書）

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。
※必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 岩手県教育委員会（後援）、岩手県総合教育センター
	事業名：NITS・教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業
	研修等名：【NITS・岩手大学教職大学院コラボ研修】 いわて教育のワールドカフェ　授業づくりを考える
	開催日時：令和４年 11 月３日　９時 30 分～12 時 開催場所：岩手大学（岩手県盛岡市上田３－18－33） 参加人数（総数）と参加者の属性：（16 人）一般教員７人、大学院生２人、大学関係者７人

内容： ※全体発表の内容をテープ起こしするなど、具体的に記載してください。研修等の様子は、写真を右に貼り付けてください。

学校は、万能ではなく、学校のすべきこと、できることを考えながら、よい授業とは何かを議論した。そのためには、一般的な資質・能力ではなく、学力として、学校で育成すべきで、かつ、育成できる資質・能力という限定された力を考えることが必要である。資質・能力は、コミュニケーション能力、批判的的思考力、論理的思考力などのように、なんでも学校が担うことになりかねなくなるので、学校ですべきこと、できることを限定していく必要がある。学校は、空気みたいな存在で、そのありがたさは、コロナの中で認識できたけれども、特に学ぶということには大きな意味がある。学校で身についてることに、大きな意味があるのである。学力向上ではなく、学力保障にこだわるということは、すべての子どもたちが、知る、わかることによって世界を広げることに注目していることを示しており、学校において、知ることの力、物事を認識することの力によって、可能性を保証している。学校に行くことの意味は、いろいろな物事を知るからこそ、生活の幅も視野も広がるのであって、これが学力保障の意味になる。授業づくりの話は、個別最適とも関係するが、今 GIGA スクール構想で起こってること、この先、どういう状況になりつつあるのかということ、あるいは、今なっているのかということと関連する。オンラインの同時双方向では、もし、回線が不安定になったとしても、スライドがプラットホームとしてのホームページ上にあれば、学びを持続しくことが可能になる。対面の教室に対して、オンラインの教室、オンライン同時双方向の教室などが多層的に作られ、展開している。学校は対面、休校になったらオンラインではなくて、実はもうすでに、学校では、対面で集いながらオンラインの教室が並行しているという状態になっている。対面で学ばなくても、オンラインにスイッチしていくことが可能であり、例えば GIGA スクール構想では、一人一台端末を用いて自分の解答を共有し、あるいは写真を撮ってクイズ番組のように一覧で見ており、対面であってもオンラインを活用している。直接質問や意見を述べるのが難しくても、オンライン上の教室であれば、チャットで抵抗なくできる児童生徒もいる。やりやすいやり方で発信し、対面でやり取りして、その一方でオンライン上の教師を見るような授業になったと考えていくことが重要である。このような授業の中では、これまでの不登校とは異なった状況が生まれている。つまり、積極的には不登校を選択することを社会が許容し始めているということである。いつでもどこでも誰とでも学べるなら、対面で集まって学ぶ意義はどこにあるのかということが問われていることであり、子供達にとって、今の目の前の学校が幸福な場になってるかどうかということでもある。現行の学習指導要領の「社会に開かれた教育課程」は、未来社会のウェルビーイングに繋がるような教育を意味している。このコロナの中で、改めて学校が子供達のウェルビーイングにつながる場になっているかが問われているのである。未来の教育に対する世論を作っていくのは、いま学校にいるこの子達であって、学校が過ごしやすく、幸福な場であれば、将来的に学校は行った方がいいとなる。明日行きたいと思える学校をどう作るのかが問われているのである。そうでないと、みんなで集まって学ぶ意味がなくなり、各自でホームスクーリングや通信制高校でいいとなれば、学校と教師はいらなくなる。これは絵空事の世界ではなく、多層的な教室と学びの変化を考えることは、重要な議論である。学ぶことのイメージは、構成主義ほど単純ではないが、その一方で一般社会の保護者の学習観は、極めて単純化され、「できる」、「解ける」で捉えられている。意味理解などが重視されていない中において、学ぶということをどう考え、それを支援する授業をどう考えていたらいいのかが問われているのである。授業を考えていく時の軸は、学ぶということにある。直接子供たちがアプリで学び、学校とか教師を経由せず、つまり授業自体がなくなり、学びだけがある状態も指摘されているが、人類史を見れば、社会環境の中でないと、絶対に学べないので、完全に一人で学ぶということは、ありえない。子供が動いていても、思考をしているとは限らないように、学習形態が新しい、古いも関係がなく、そこに学びがあるかを最も重視する必要がある。「集める」、「調べる」、「深める」、この動詞の違いに注目してみるだけでも、子供たちの同じような活動の奥に、どのような学びがあるかを見ることが可能になり、授業をつくるときの視点となる。

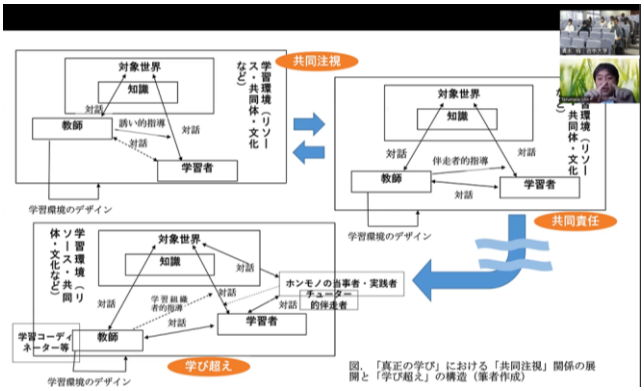
成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

授業づくりに対し、「本物の科学者のように」「本物の数学者のように」授業を進めていくこと、つまり学習内容を教えるだけでなく、「学習者を育てる」ことが、学校の授業において大切であることに気付く機会となり、教員としての自信を持たせることにつながり、教師教育において必要な学びが明らかにされた。

学びの場の多様化は、学ばせる場も多様化してるということであり、子どもたちをどのような場で学ばせるかという授業をつくるための引き出しをたくさん持っていることがこれからの時代には必要であり、そのような教師のロールモデルを提示することが教師教育の目的となり得ることが明らかにされただけでなく、パフォーマンス評価の意義と重要性について理解を深める機会となった。

授業の構造において「材」が重要な意味をなし、その「材」とどう出会わせるかが授業づくりであることがわかりやすく示され、「材」の開発や研究は、教師が先行研究者となって、子どもとともに学び、深めていくことであり、教師の授業中の立場に対する認識が深められた。

アイディアや工夫したこと： ※3～5 つ程度の箇条書きしてください。

・飲食しながらリラックスした雰囲気をつくるためにワールドカフェ方式を採用
・話しやすい場とするための普段着の服装
・講師と対話ができるように研修会の人数を制限した少人数開催
・教員の日々の疑問や要望に答えるテーマとしての授業づくりを中心としたテーマ設定

＜写真・図など＞ ※会場の熱気や規模がわかる写真、参加者の表情がわかる写真（寄って撮影またはトリミング）を撮影してください。